

# 北の文脈ニュース 第67号

## ◆第35回企画展記念講演会「石坂洋次郎の思い出」講師：今井 則三 氏(元小学校校長、俳人)◆

(平成23年9月24日(土) 午後2時～4時 於：弘前図書館2階視聴覚室)

講師に、石坂洋次郎、うら夫人の甥御である、今井則三氏を迎えて開催された講演会は、大盛況でありました。

今井氏にとって洋次郎は身近な伯父であり、師でもありました。今井氏から、洋次郎夫妻が起居した今井家の細密な間取り図が添えられた資料や、貴重な婚礼写真が公開され、一世を風靡した大作家石坂洋次郎の日常風景が垣間見られる講演会となりました。昭和19年に、洋次郎夫妻は今井家(弘前市本町)へ移り、終戦間際の当時、隣組班長として防空壕掘りや日用品の配給などの仕事をしました。

戦後は、執筆活動を本格的に再開し、朝日新聞へ連載され大好評となった「青い山脈」も、今井家で執筆されました。昭和21年に東京田園調布へ居を移してから、洋次郎は執筆のため、春と秋には帰弘し、書斎の机にはいつも専用の原稿用紙が載せられていました。洋次郎作品には、弘前で出会った



沢山の人々が登場しますが、その一人、「石中先生行状記」の中村君のモデルとなった、中原春雄さん(うら夫人と小学校同級生)との交流から、当時の弘前の生活文化が織り込まれました。また、昭和24年に、「青い山脈」映画化の挨拶に、俳優の池部良、杉葉子が来弘した際には、近隣の人たちが100人程も集まったことや、「青い山脈」作中の、梅の木のある庭でのワンシーンは、今井家の庭がモデルになったことなど、作品の舞台裏を窺える楽しいエピソードが語られました。最後に、10月7日の洋次郎忌をもとに始まった、山脈忌さんみやくきが紹介されました。連峰社が中心となり、昭和62年から平成12年まで続けられた山脈忌は、全国から2,800句もの俳句が寄せられたそうです。石坂作品に親しみ語り継いでいくためにも、有意義な講演会となりました。

石坂洋次郎作品は、当時の読者や映画ファンにとって、今も色褪せない魅力があり、次世代にも共感できる明るさがあり、当時の文化も新鮮に映るのではないのでしょうか。貴重なお話をありがとうございました。

## ◆第35回企画展『青い山脈 ー映画化された石坂洋次郎作品ー』開催中◆



本展は、石坂洋次郎原作による映画80本の中から、「若い人」「何処へ」「馬車物語」「青い山脈」「石中先生行状記」「陽のあたる坂道」「あじさいの歌」「あいつと私」「草を刈る娘」「光る海」の10作品(映画化本数30本)を取り上げ、なぜ石坂原作の映画がこれほどまで多く作られたのか、その答えとなるものを、原作となった作品の数々とともに紹介しています。本年1月からの開催以来、ポスターを見るや主題歌を口ずさむ方、物語のあらすじや出演者について懐かしそうにお話ししている方等、多くのお客様を迎え好評を得ています。来館者それぞれに思い出が石坂作品にあるのだと気づかされます。

昭和45年10月26日の毎日新聞の第25回「全国読書世論調査」によると、石坂洋次郎は第4回の昭和25年から「好きな著者」の年次ベストテンに入った回数は20回です。石坂は昭和46年までの約20年間一度もはずれることなく、吉川英治、夏目漱石とともに作家上位3人の一人に入っています。

この調査期間の石坂の執筆活動をみると、昭和22年戦後初の新聞小説「青い山脈」の連載、昭和24年製作の映画「青い山脈」の爆発的なヒットにはじまり、「石中先生行状記」(小説新潮、昭和23年)、「陽のあたる坂道」(読売新聞、昭和31年)、「あじさいの歌」(中央日本新聞・西日本新聞・北海道新聞、昭和33年)、「光る海」(朝日新聞、昭和37～38年)など、新聞や雑誌への連載が続き、昭和30年代は作品数、映画化本数ともにピークを迎えます。作品を発表するたびに新たな感銘を与えベストセラーとなり、また次作を期待された石坂は、広く国民に愛された作家だったと言えます。

本展では、没後25年という節目を迎えた今もなお、時代を越え人々の記憶に残る石坂洋次郎の原作本の数々と、

銀幕のスターたちのスチール写真、「青い山脈」(昭和 24 年)や「若い人」(昭和 27 年)などを含む 14 枚の懐かしい映画ポスターなど多数展示しています。企画展は平成 23 年 12 月 28 日まで開催します。

(2)北の文脈ニュース 第67号

平成23年10月1日(土)

## スポット企画展「作家が描いた明治・大正の津軽」終了(6月1日~8月31日)

石坂洋次郎や佐藤紅緑のように、津軽に生まれ育ち、その記憶を記した作家は勿論、津軽を訪れ、その印象や感動を記した作家もまた多く存在します。例えば幸田露伴は「易心後語」で嶽温泉の情景を語り、森鷗外は「北遊記」に弘前に滞在した記録を残しました。河東碧梧桐の「三千里」は、当時の荒れていた弘前城の様子や、今は見られなくなった岩木川の雑魚小屋の風景などを伝え、谷崎潤一郎は津軽の冬景色を「<sup>ひょうふう</sup>颯風」の中で情感豊かに語っています。

そんな文豪たちの目から見た津軽の風景を、「弘前城」「ネプタ」「りんご」「岩木川」「嶽温泉」などの項目にわけて、書籍とともに、当時の絵葉書や写真を交えて紹介しました。

今回のスポット企画展は、今でも変わらない津軽の情景と共に、今は失われた明治・大正当時の津軽の懐かしい風景が偲ばれる展示でありました。

## ◆作家今官一の資料展開催中(10月1日~12月28日)◆

平成 22 年度に、今公恵氏(故人)から今官一資料が多数寄贈されました。本展は、寄贈されました手帳や書簡を通して、



作家今官一を多面的に紹介する内容となっております。

今官一は、明治42年に弘前市西茂森町蘭庭院で生まれました。昭和31年3月に刊行した『壁の花』で、同年7月、第 35

回直木賞を受賞しています。本展では、同年6月に行われた、『壁の花』出版記念会「芳名帳のほか、「今官一詩集・『牛飼いの座』」の各出版記念会の芳名帳も展示しています。これらの芳名帳には、多くの作家のほか、県内関係者の名前も多く残されております。

また、手帳やフォトダイアリーからは、作家今官一の日常を想像することができ、大変興味深いものとなっております。

是非この機会に、皆様のご来館をお待ちしております

### 新資料紹介

#### 絵本『フィリッピンの子供』 石坂 洋次郎

昭和 18 年 11 月 20 日に発行された、石坂洋次郎の絵本(6~8 歳向け)で岡本ノート出版部より8万部、定価 45 銭で発行されました。

当館では、石坂洋次郎の資料を数多く保管しておりますが、絵本は初めての資料となります。石坂洋次郎の文章と、鈴木栄二郎・野中勲夫・永井保筆の明るい色遣いの絵で、当時のフィリッピン各地の子供たちの遊びや生活の様子が描かれています。

来年の新資料展等で展示したいと思っておりますので、ぜひご覧下さい。



## ◆第 36 回企画展◆

### 「寺山修司展」(仮称)のお知らせ(平成 24 年 1 月~12 月)

#### 「マッチ擦る つかのま海に霧深し 身捨つるほどの 祖国はありや 寺山修司」

寺山修司は、弘前市紺屋町に生まれました。青森高校在学中から、俳句や短歌を作りました。

早稲田大学に進学のため上京。上京後は、短歌で注目され、その後脚本家、劇作家、演出家として頭角を現します。

演劇実験室・天井桟敷を主宰し、アングラ演劇のカリスマ的地位を確立しました。

47 歳という若さでこの世を去るまでの、凝縮された寺山ワールドを紹介します。

北の文脈ニュース 67号 発行年月日:平成23年10月1日 編集・発行:弘前市立郷土文学館  
〒036-8356 青森県弘前市下白銀町2-1 TEL0172-37-5505 <http://www.hi-it.net/~bungaku/>